

1. 小谷隆一 誕生

－商家の長男として－

1924(大正13)年、江戸時代に創業した京都市内の老舗紙問屋「伊勢藤商店」の長男として生まれ、姉と妹とともに何不自由ない少年時代を過ごしました。祖父・藤七から聞いた心学の教え「正直、儉約、勤勉」は生涯の支えとなりました。一方で、父藤二郎のおかげで、野球、水泳、山登りなどの様々な体験をしますが、特にスキーに魅入られるようになります。



こたに りゅういち
小谷 隆一

生年月日

1924(大正13)年8月16日(甲子年生まれ) ※ 甲子園球場竣工年

本籍

京都市中京区新町通三条上る町頭町
(伊勢藤商店新町店 ※現存せず。現在跡地は月極駐車場)

家族

祖父 藤七(二代目)、祖母
父 藤二郎(伊勢藤商店三代目社長)、母 ふさ
姉 千重子…お姉ちゃん、妹 登茂子…トモちゃん

小学校

たついでじんじょうしょうがっこう
京都市立龍池尋常小学校
1929年築の建物は、京都国際マンガミュージアムとして
利用されている。



昭和初期の伊勢藤商店
手帳の扉より



新町店の様子(昭和28年頃)

『山なみ帖その後』「私とスポーツ」より

私の父は明治二十八年(一八九五年)生まれだが、当時としてはまだめ
ずらしかった野球が好きだった。といっても、プレーするのではなく、
もっぱら観戦で、たまにキャッチボールをするくらいだった。

私はこの父と、小学校の二、三年生頃にボール投げをすることから、
スポーツとの関わりが始まった。昭和七、八年だったが、よく家の前の
道路で父とボール遊びをした。京都の中京の真ん中の家だったが、その
頃は交通といってもたまたま自転車を通るくらいで、自動車などはめった
に走っていないだったので、特に日曜日などは格好の遊び場であった。

展示資料No. 1

『株式会社イセト 創業150周年社史
「革新と継続の軌跡」』

株式会社イセト

2005年12月20日発行

小谷達雄氏 蔵



展示資料No. 2

『紙とともに百十年』

小谷 藤二郎

1966年12月5日発行

小谷達雄氏 蔵



伊勢藤(イセト)の発祥と発展

1855年 小谷藤七が伊勢屋商店を創業(店舗は西洞院三条)
(和洋紙の卸小売業を始める)

1882年 藤七が2代目店主に就任

1911年 新町店設立

1919年 伊勢藤商店に改組

1921年 藤二郎が3代目社長に就任
壬生川工場(第一工場)設立

1924年 小谷隆一誕生

1928年 梅津工場(第二工場)開設

1941年 伊勢藤紙工(株)に改組

1950年 小谷隆一入社

1954年 小谷隆一専務渡欧
(売買交渉で活躍…その後の躍進のきっかけとなる)

1955年 独ギーベラー社ビジネスフォーム印刷機導入

1966年 小谷隆一が4代目社長に就任
厚木工場開設

1979年 イセト紙工(株)に改組

1991年 滋賀工場開設

1997年 (株)イセトに改称
小谷達雄(現イセト会長)が5代目社長に就任

小谷隆一会長に就任

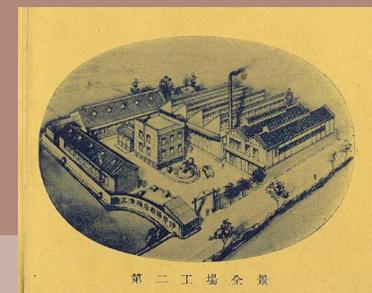
2002年 小谷隆一名誉会長就任



1953年



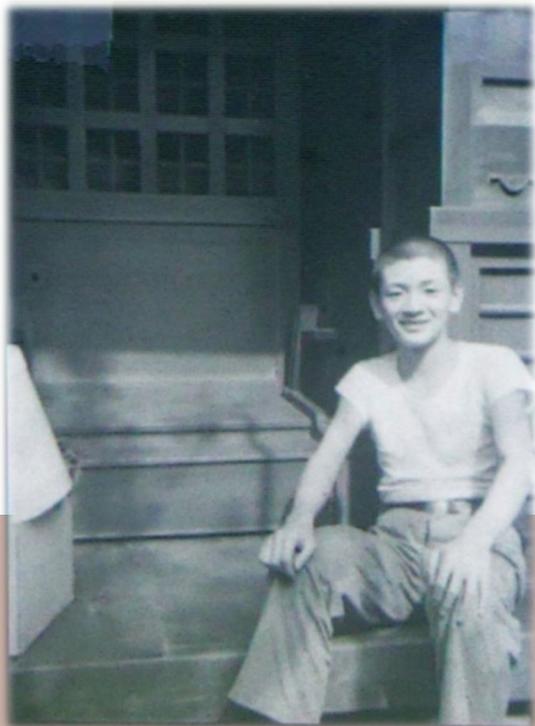
壬生川工場



梅津工場

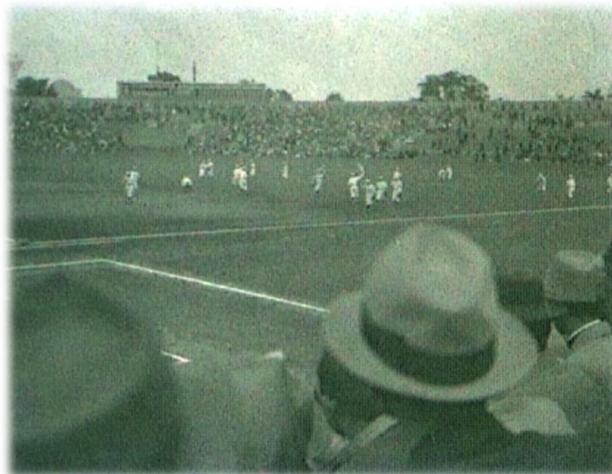
小学生時代に使っていた会社手帳の裏扉より

少年時代



お手伝い

(写真)小谷達雄氏 蔵



野球観戦



丹後由良

『山なみ帖その後』 「私とスポーツ」より

昭和十年（一九三五年）頃だったか、日米野球が京都で行われ、父につれられて京都市郊外の西京極球場へ観戦に出かけ、ホームランを打つベーブ・ルースを見て喜んだことがあった。東京六大学の野球放送を聞くのも好きだった。夏には甲子園球場の中等学校野球大会（いまの高校野球）を父のお供をして何度も見に出かけたものだった。暑いスタンドで氷のカチ割りをほおぼり、満員の食堂で名物のカレーライスを食べたことは、なつかしい思い出である。

野球が好きだったから、学校から帰るとランドセルを放り出し、グローブひとつを持って自転車に乗り、近くの公園に行つたものである。小学校五年から中学初年の頃だった。夏休みには半月以上も海水浴に出かけ、黒ン坊になって泳ぎまわっていた。

(後略)

『山なみ帖その後』 私とスポーツより

スキーと登山への傾斜

しかし、私に決定的な影響を与えたのは、なんともいつてもスキーと登山だった。昭和十年、小学校四年のときから従兄につれられてスキーを始めた。現在はなくなつたが、京都市の西の方に愛宕山スキー場があり、市内から一時間余で行くことができ、標高九二四メートルで雪質もよい、格好のゲレンデであった。最初は二月のことで、一日中雪が降っており、狭い小屋で薪の煙に目をしょぼつかせながら暖をとっていたのをいまもよく記憶している。何回も通つたが、その愛宕の帰りには凍てついた参道の石段をバリバリ音をたてながら滑り降りたりしたものだ。まさしくスキー暴走族であった。

(後略)



函館山スキー場(滋賀県)

(写真)小谷達雄氏 蔵